

# 卒業論文制作が学生の心理的発達に果たす役割 — 学生相談事例によるモデル化の試み —

上田 琢哉

学校教育講座 (心理学)

## The Function of Making a Graduation Thesis on Psychological Development — Modeling by Case Studies of Student Counseling —

Takuya UEDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### I 問題と目的

大学生の卒業期は、学生生活から社会生活への移行に伴ってさまざまな心理的作業が行なわれる重要な時期であると言われてきた(鶴田, 2001)。特に学生相談の現場では、卒業間近に心理的な作業を集中的にやり遂げるクライアントが多いことから、その様子を“もうひとつの卒業論文を書いている”ようだと表現することがある(鶴田, 1994)。それは意義深い喩えであるが、筆者の経験では、現実の卒業論文そのものにも、この時期の学生の心理発達に果たす大変大きな役割があるように思う。というのも、実際に「卒業論文だけ書けない」と訴えて相談室を訪れる学生が多いこと、また彼らが卒業論文に取り組む過程で心理的にも成長する様子をしばしば観察するからである。ところが、そのような卒業論文のもつ発達促進的な機能については、これまで丁寧な検証の対象とはなっていない。この理由は、卒業論文の相談は専門の教員に任せるべき教育の問題であり、それ以外の者があまり踏み込むべきではないと考えられてきたことによると思われる。

本論文の目的は、卒業論文を制作するという行為の中に青年の心理発達を促す働きがあるかどうか、あるとすればどのようなものであるかについて、学生相談の視点から明らかにすることである。

### II 卒業論文のもつ心理発達の意味

「卒業論文だけ書けない」と訴える学生がいるということは、卒業論文に他の課題と違う特別な意味があるからだとして仮定できるように思われる。言い換えると、その学生にとって重要な問題であっても、普段の学業

課題や日常生活ではなかなか表面化しにくいものがあり、卒業論文により初めてそれに直面させられることがあるということであろうか。

ここではまず研究内容以外の面で、卒業論文が学生にどのような課題として映っているかを考えてみたい。

1) 回避できない課題であること: 卒業論文は基本的に「出さなければ卒業できない。他の手段(単位)と代替がきかない」という性質がある。したがって、卒業論文は受身的・回避的な傾向のある青年にとって、内容以前に非常に大きな障壁と感じられるだろう。

2) 必要とする時間・労力が大きいこと: 大学教育の中でもっとも多くの時間をかけて取り組む必要のある課題であるということが卒業論文の特徴である。レポートに比して分量も多く、題目発表や中間発表などの機会もあるため、かかる労力も大きい。これらは計画性や粘り強さ、ある程度のところで内容をまとめる力などの現実的スキルを学生に要求すると考えられる。実際、卒業論文を通してこの種の現実的作業能力が鍛えられたと報告する人は多い。

3) 論理的な形式が重視されること: 論文はあたかも数学の証明問題を解くように論理的な裏づけを示しながら簡潔に書かなければならない。ところが、わが国の学生はこの「論理形式に厳密である」ということを苦手としている人が多いように思われる。したがって、卒業論文はそのよい訓練になるだろう。鶴田(2001)も“学問の発達した現代では必ずしも学問的に貢献できる卒業論文を作成することが求められているわけではない”が、“自分の考えと客観的材料を結び付けていく学習という意味で卒業論文の役割は大きい”と述べ、論理的思考を鍛える学習としての意義を指摘して

いる。われわれは本来、スポーツやゲームにおいて“論理的に思考するということを楽しむ習慣”（鹿島，2003）をもっているのであるが、卒業論文を制作する過程で、そのことに初めて意識的に気がつく学生は多い。

4) 文章表現・レトリックの巧みさを要求すること：論文は論理的に正しければよいというだけでは済まない。卒業論文は、論文であるがゆえに、他者に対して説得的にアピールするという作用をもつ必要がある。いわば“論理と同じくらい語り口が面白くなくてはいけない”（鹿島，2003）のである。このため、卒業論文制作はレトリックの技術を含めたその人の表現能力という問題を惹起しやすい。レトリックは論文において本質的ではないという意見もあるが、ここでつまづく学生が多いということは見逃すことができない。「頭では言いたいことがあるのに文章が上手く書けない」、「語彙が少ない」ということで劣等感を持って相談におとずれる学生は多い。逆に、卒業論文を仕上げることで他者に対して表現すること全般に自信をもつようになる人もいる。

5) 自ら「問い」を作る力を必要とすること：論文とレポートの違いについて、鹿島（2003）は“レポートは与えられた課題について答えるものだが、論文は「問い」そのものを自分で作り出して、それに答えていくものである”言う。これは非常に重要な視点である。学生にとって卒業論文は、それまで受け身でよかった学習がそうもいなくなるほとんど初めての体験と言ってもよいだろう。東（1994）はわが国の学生の学び方の特徴を“受容的勤勉性”と表現したが、与えられた課題を解くことに慣れているわが国の学生が卒業論文を苦手とするのは当然かもしれない。卒業論文は学習スタイルの根本的な変更を迫るのである。

6) 心理的な悩みがオーバーラップされやすいこと：卒業論文はレポートと違いあらかじめ問題が与えられているわけではない。よって、学生はある程度自由に自らの興味関心に沿ったテーマ選択をすることができる。このため、研究テーマはその時期の本人の心理的な悩みや精神的葛藤と自然と結びつきやすい。鶴田（2001）も“特に文科系の学生の場合には、卒業論文の課題と学生自身の内面的課題が重なっている場合が多い”ことを指摘している。実際には、このことが卒業論文を書くほどよい動機になっている場合もあるし、テーマと上手く距離が取れず行き詰ってしまう場合もある。いずれにしても、卒業論文は個人の心理的な悩みを知的に乗り越えるための一手段として用いられることがある。

### Ⅲ 卒業論文の3階層モデル

上記のような卒業論文のもつ研究内容以外の側面

は、大きく3つの心理発達の意味にまとめることができると考えられた。本論文では、それを卒業論文のもつ「課題性」という言葉で表現しておきたい。課題性とは、“主体の認知する状況の理解にかかわる過程を示すもの”（永田，2011）であり、これは、「その状況が自分に何を求めているかについての個々人の意味づけの違い」をあらわす概念と言い換えてよいだろう。

- ① 心理的課題性 (psychological issue)：論文を制作することが、個人にとって心理的な悩みや精神的葛藤の解決を意味するもの。したがって論文のテーマも個人の人生観や心理的な悩みと直結していることが多い。ここにおいては、心理的問題に直面しうる力や、そこから適切な「問い」を作り出す力などが重要となる。このような側面をまとめ、卒業論文に含まれる課題性のひとつとする。
- ② 表現的課題性 (expressive issue)：他者に対して何かを表現したいという欲求を満たし、また自らの表現能力に自信をつけていく素材として卒業論文が使われるもの。ここでは、文章表現の巧拙の問題や他者との比較の問題がテーマとなりやすい。卒業論文制作がこのような働きを帯びている場合を表現的課題性としてまとめる。
- ③ 作業的課題性 (performance issue)：論文制作があきらめずに、または要領よく物事を遂行する力をつけるための訓練的行為としての意味をもつもの。ここでは社会的当為（卒業の必要条件）が強調され、内容よりも課題達成のための計画性やパフォーマンスが主なテーマとなる。このような卒業論文のもつ働きを作業的課題性としてまとめる。

\*

筆者は多くの事例を経験した中で、先の3つ課題性をDeci et al (1985)の「自己決定理論」(self-determination theory)に沿って一次的に表現できるのではないかと仮定した。これを「卒業論文の3階層モデル」と名づける(図1)。

Deciらの自己決定理論は、人間の基本的欲求に「自律性の欲求」、すなわち“自己決定的でありたい”という欲求を仮定し、種々の行動はこの基本的動因によって説明できるとするものである。このように自己決定理論は動機づけ理論の一種であるが、従来の動機づけ理論が動機を「外発的か内発的か」の二分法的にとらえてきたのに対し、動機づけを他律から自律へ向かう連続体としてとらえようとするもので、説明範囲が広く、画期的なものとなっている。つまり、最も自律的な(自己決定の程度が高い)状態を内発的動機づけの状態と考え、自己決定の程度が弱くなるにつれ外発的な動機づけとなると考えたのである。Deciらの自己決定理論は、その後多くの実証的研究によってその妥当性が確認されており、動機づけ理論に新しいムーブメ

ント起こしている。わが国でも、自己決定理論をもとに小学生から大学生にわたる学習動機づけの構造的変化を明らかにした研究（岡田，2010）などが行なわれている。

本論文で扱う「卒業論文制作」という問題は、基本的には学習動機づけの枠組みでとらえられるだろう。したがって、動機づけの現象を幅広くとらえることが出来る自己決定理論をそのモデルの説明原理として用いることは妥当であると考えられる。

本論文で提示する3階層モデルは、上の課題性ほど卒業論文制作に関する自己決定の程度が高く、下の課題性ほど自己決定の程度が低いことを示している。同時にこれは、上の課題性ほど内発的動機づけが高く、下の課題性ほど外発的動機づけが高いことを表す。ここで内発的動機づけとは、活動すること自体がその活動の目的(自己目的性)であるような行為のことであり、一方、外発的動機づけはその活動が手段性、道具性をもつ行為のことであり(Deci et al, 1995)。よって、本モデルでは上の課題性ほど卒業論文を書くことそれ自体が目的であり、それについて自己決定的であることが要求されていると考えている。同じく、下の課題性ほど卒業論文を書くことが他者との比較や卒業のための手段、道具になっており、自己決定の程度が低いことを示している。

また、階層であることは、「低次の課題性が達成されていることが、高次の課題性が出てくる条件である」ということを想定している。ただし、これは「上の階層へ行くほど適応的である」ことを意味するものではない。ましてクライアントの訴えの深刻さや病理的なレベルとは関係がないということは、重ねて断っておく必要があると思われる。本モデルはその人にとって卒業論文を作ることの真の発達の意味がどこにあるのかを示しているに過ぎない。さらに、モデルにはカウンセラーの〈かかわり〉と〈存在〉の影響も想定されているが、これは考察において詳しく論証することとする。

図1のようなモデルは、卒業論文のもつ心理発達の

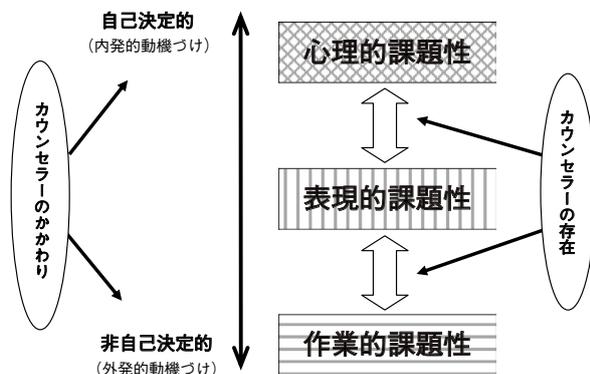


図1 卒業論文の3階層モデル

意味を単純化しすぎているかもしれないが、本質的要素はとらえていると思う。

以下、本論文では、学生相談の事例を分析することによって、卒業論文制作が青年の心理発達にどのような影響を及ぼしていたかを明らかにし、加えて仮説的に立てた3階層モデルの妥当性を検証する。

#### IV 事例

カウンセラー（以下Coと略す）は私立総合大学の学生相談室に所属。クライアント（以下Clと略す）は自発的に相談室を訪れた学生である。事例はいずれも「卒業論文が書けない」という主訴において一致している。また3例とも他の単位については問題なく取れていた。

（以下、「」をClの発言、〈〉をCoの発言とする。  
#は面接回数をあらわす）

##### 1) Aさん、男性、24歳（哲学科 当時大学6回生）

主訴：卒業論文が書けない。単位の残りは卒業論文だけ。好きなテーマであるため本はたくさん読んでいるのに、3年目の今になってもまだ1行も書けないままである。6回生になり、大学にはまったく来ていない。一方、1年以上にわたって、毎日朝7時から夕方4時までのスーパーの品出しのアルバイトを続けている。

##### 第1期（#1～#15）

入学後、サークルにはいろいろ入部したが、それよりも哲学（彼曰くマイナーな哲学者）に興味があり、自宅でそういった書物を読みふけることを優先させたため、いつもサークルを追い出されるといったことを繰り返していたと言う。哲学に興味をもった理由を聞くと、「感情を抑えたかったから」という答えが返ってくる。高校時代、不良によくからまれ、体をがむしゃらに鍛えて対抗しようとしたが腰を痛めてしまい、以来「このような感情にふりまわされる自分がいけないんだ」と考えるようになったと言う。卒業論文のテーマも「いかに感情をコントロールできるか」、それを彼の尊敬するスピノザの『エチカ』に則って証明するというものであった。

Clの夢（#2）：死神が出てくる。「最高の哲学を書かせてやる。その代わりに命をよこせ」と言う。自分は同意し、書く。しかし、自分では何が書いてあるのか読めない。「何が書いてあるの?」と顔をあげて聞こうとした瞬間に首をぱっさりと切られる。

これを聞き、Coは少なくともこの方にとっては死神と命を交換するほど哲学が大事であるのだと思い、慄然とさせられた。また、内容について今後相当真剣に聞く必要があると感じ、この後から『スピノザの世界』という入門書を持ち込んで、彼の話の聞くということをはじめた。Aさんは最初Coをバカにするような様子

も見られたが、定義を説明したり、Coの疑問に答えたりする中で、徐々に熱を帯びてその内容を語られるようになっていった。

(#6)「自分はテーマと距離が近すぎる」、「思想を生活するだけで精一杯だ」と言う。Coは(たしかにそれでは卒業論文など書く気にならないであろう)と感じ、またそのように伝えた。ふと彼の方から、最近友達がほしいというような気持ちもあり、NPO法人で本の修復(装丁)をやっているところに月に一度ボランティアに行くようになったと聞かされる。

この時期、父親に末期の肺ガンが発見される。これは感情のコントロールを目標としてきた彼にとって、まさにそれが難しいものであることを思い知らせる出来事となった。この頃、Coが〈僕は感情はコントロールできないもののように思う〉と言ったことで、Aさんと議論になったこともあった。

(#10)本は読んでいるが、書こうとするとまったく筆が進まない。「哲学というのは生活するものなので、それがいいのはただ言葉だけという感じで、書こうという気持ちにならないのです」と。Coは〈あなたにとって書くということはそういうことなのですね〉〈僕はスピノザが正しいかどうか分からないが、あなたはそれを“研究”している先生よりも、ずっとスピノザに近づいているとは言えると思う〉と伝えた。彼は「スピノザは大変難しい。だから1、2年では逆にウソになってしまう。でも、そういうことは周りにはなかなか分かってくれませんか。留年して何やってるんだ、となるんです」と苦笑していた。

その後、彼はずっと続けてきたアルバイトをやめる。そしてアルバイトの経験を振り返り、生活とスピノザ哲学とを関連づけながら語られたりした。

## 第2期 (#16~#21)

「最近音楽(ロック)にはまっている」という話が出る。以前は哲学の話題以外全く話されなかったことを考えると、これは大きな変化であると思われた。また不思議なことに、卒業論文について急にペースが上がり始めている。他大学の教授のゼミに聴講させてもらいに行くなど、積極的に動き始めている。#17には自分で装丁したスピノザの文庫本を持参し、見せてくれる。〈卒業論文も装丁しては〉というCoの言葉に、「外側は立派でも中身はたいしたことないですから」と笑って返された。

その後も好調である様子が報告される(#18)。「寝食を忘れる」とはこのことかと思われるほどで、朝起きたらすぐパソコンに向かい、夜遅くまでずっと原稿を書いていると言う。Coが〈スピノザを成仏させるくらいのものでしょね〉と言うと、「ほんとずっととりつかれていたの。やっと放してもらえるかな」と笑っていた。一方で、彼の口から「結局、分からないということを書いているんです」、「論文は出せばいい

んです」と聞かれるようになったのが意外に感じられた。

しばらくして、期限前に卒業論文を提出し終えたと報告に来られた。〈卒業論文で考えたようなことは、今後も深めていくおつもりですか〉と聞くと、意外にも「一区切りにするつもり」、「精神的な遺書のつもりで書いた。答えが出ないなら、いつまでも抱えていたって仕方がない」、「何か別のことをやりたいという気持ちもある」と言われた。

その後すぐに彼は下宿先を引き払い、病気の父親をサポートしながらできる仕事を探すために実家へ帰った。しばらくして近況を報告するために来室し、「また毎日働くようになった」と、笑いながら日常生活について話してくれた。

## 2) Bさん. 女性. 22歳 (学際分野 当時大学4年生)

主訴：自分の意見をうまく言い表すことができない。自分は他人と比べて得意とするところがなく、自信がない。発表や大勢の前で意見を言うことが苦手である。特に文章が上手く書けない。いつもありきたりの内容になってしまう。原稿用紙を見ているだけで自然に涙が出る。このようなことから卒業論文が書けない。

### 第1期 (#1~#5)

(#1)人前で話すことが苦手であったため、それを克服しようと大学では演劇部に所属。これに熱中して取り組んだことが語られる。もともと趣味として絵を描くことが好きだったが、「やはり才能なのかなあ、他の人と比べて下手に見え、だんだん描けなくなってきた」、それで大学からは他の表現をと思い、演劇へ向かったのかもしれないと言う。話は常に「表現にはオリジナリティが必要だ。自分にはそれがない」という結論に至って行き詰る。

卒業論文のテーマは、ダダと呼ばれる20世紀の絵画芸術を取り上げて論じてみたいというものだった。しかし、指導教官のところへ相談に行くと別のテーマをすすめられ、迷っていると言う。Bさんの言動からは指導教官と納得のいく話し合いがもてていない様子が伝わってきた。

(#3)卒業論文の資料は集めて読み進めているが、なかなかまとめて言葉にできない状態が続く。書けなくて、他の人に相談すると「もっと自信をつけろ」と言われるばかり。「他の人はスムーズに自分の考えを表現できているようであらやましい」、「オリジナリティを強調したいのに、いつも他人と比べてひるんでしまう」ということが語られる。「とにかく何でもいから自分で作りたかった」と涙を流していた。

### 第2期 (#7~#11)

最近になりふたたび絵を描き始めたという話が出る。「私自身が“才能”という言葉に過剰に反応してき

たところがあるのかもしれない。最近は描いてもいいんだと思うようになった。卒業論文の価値、中身の話もそうだと思う」〈卒業論文を書くことで、表現することがあなたの中に自信となって収められていくことが大切なのかなと思って聞いている〉と言うと、「まさにそうです」とうれしそう。また演劇の話になると、身振り手振りを交え、立ち上がらんばかりに生き生きと話される。演劇というのは、本当にいろんな意味で自分を成長させてくれたと言う。役を演じることについて「演劇はむしろオリジナリティを主張したら、おかしなことになるんだ」とも言っていた (#8)。

提出期限は差し迫っていたが、この後急にピッチを上げて卒業論文を書き始める。「表現すること自体の尊さと、人に認められたいという気持ち。昔は後者ばかり気になっていた。最近は前者も大事と思うようになった」と言われる。

その後卒業論文を提出する。「もちろん内容的には不十分」、「でも、書くということに、だいぶ抵抗がなくなったような気がする」と。〈おそらくそれがあなたにとって一番大切なことだったのですね〉と言うと、笑ってうなずいていた。「自分は表現するのが苦手だとばかり思っていたが、演劇を楽しんでいる」と振り返る。最後に「今からでも就職活動をやってみようと思っっている」、「とにかく向き不向きにとらわれず、応募してみようと思うようになった」と言われ、面接は終結となった。

### 3) Cさん、男性、23歳 (地理学科 当時大学5回生)

主訴:新しいことに取り組むときに自分から動けない。取っ掛かりのところで詰まってしまう。大学入学当初からその傾向はあり、授業もずっと受け身だった。発表したり、書いたりするのは苦手これまで逃げてきた。単位修得は順調であるが、卒業論文だけ残っている。サークルには入っていないが、アルバイトは2年以上続けることができています。

#### 第1期 (#1~#11)

Cさんは話し振りから人柄の良さがにじみ出るような好青年であった。しかし面接で「なんとなくできない」と照れたように繰り返される様子に、Coは特別な難しさも感じていた。

題目発表が迫っているが、まだ教授に相談に行っていない (#3)。昨年もなんとなくフェイドアウトしてしまったと言う。その後Coに促され、ようやく教授に相談に行くが、「とりあえず論文を読んでテーマを見つけていくのがいいんじゃないかと言われた」と苦笑していた。〈レポートと違って卒論は自分で問題を見つけなければいけない。そこが難しいんだよね〉と言うと、「そうなんです。他の人の発表を聞いているのはとても楽しいですけど」と言っていた。

この頃は、彼の趣味であるカメラの話や好きな本の話を中心にし、卒業論文自体はあまり話題にしなかった。むしろCoはそのような興味、関心の幅を広げることが、論文のテーマを見つける近道ではないかと思っていた。

しばらくして、なんとか題目は提出できたと報告がある。その後中間発表まで出席できたことから、Coは先行きに楽観的な見通しを持っていた。しかし、結局この年も卒業論文を仕上げることはできなかった。彼は「これからどうしたらいいか自分でも分からない」と自嘲気味に笑う。〈僕としては、あなたがあと1年かけて卒業論文を仕上げることは、とても大きな意味があるように思うのだけど……〉と言い、もう一年やってみようと伝える。しかし、その後来談が途絶えてしまう。

#### 第2期 (#12~#24)

Coは折々に手紙を出し続けていたが、次年度の夏ごろ突然来室された。「就職が決まりました…… (笑)」 「そのご報告に」と。それは驚き、感激することだったが、一方で卒業論文については「まだ何もできていない」と言う。

この後再び継続来談となったが、依然として何も進まない時期が続く (#15)。このため、Coからはできるだけ具体的なアドバイスを提示するようにした。例えば、家ではどうしても手につかないというので、図書館へ通う習慣をつけること、何も進まなくても時間を決めて机に向かうことなどを伝えた。この時期はCoとしても必死で、面接時間をオーバーすることたびたびであった。しかし同時に、CoとしてCさんの場合一般的な面接の枠組みを多少越えることも必要であると考え始めていた。

(#17) 就職先から「どのような卒業論文を書くのか、教えて欲しい」と要請があり、ようやく題を決めることができる。『郊外ニュータウンの成立時期による比較』というもので、問題としてはまとまっている印象であった。しかし、どこを郊外として設定するかというところで逡巡しており、Coとの面接の中でやっと便宜的に設定する決心ができる。この頃は、内容よりもいかに形式を整えるか、それにはある程度コツがあり、また身につけることができるものでもあることを繰り返し伝えていたように思う。

彼はきちんとノートを作っていたので、それを題材に具体的に相談を進めることもした。資料を並べて二人で項目ごとに検討したり、相当内容に踏み込んだ形にもなった。必然的に面接の頻度も増えていった。このようなやりとりから論文制作は少しずつ前進した。この頃、Coは(代わりに書けるものなら書いてあげたい)と思うほどであった。

ようやく最後の仕上げに入った頃、彼は意外にも内容にこだわりを見せるようになる (#22)。自分なりに

新たに分類し、積極的にデータを取り直したりもし始めた。しかしながら、そのことにより再び進みが遅くなっている。Coは(なぜここに来て)という思いで冷や冷やとした。

Coの夢:Cさんが「卒業が決まった」と相談室に報告に来る。一緒に喜んでいる。

この夢から、CoはCさんの状況が相当気になっているのだと自覚させられた。

この夢の数日後、彼から「出すことができました」と報告があった。生まれて初めて徹夜でがんばることができたと言う。ただ本人は晴れ晴れとした気持ちというより、もう少し巧みに書けなかったかという後悔さえある様子だった。

Cさんは卒業が確定した後、最後に報告に訪れた。卒業後は上京して一人暮らしをすることになると話す様子に、以前は見られなかった自信のようなものを感じた。その後手紙をいただくことがあったが、「(Coと面接することが)とにかく楽しかった」と書いてあったのが、うれしいと同時に不思議な思いがした。

## V 考察

### 1. 事例の特徴とモデルの限界について

卒業論文が個人制作として求められるのは、主に人文科学系であろう。しかし、同じ人文科学系でも法学部・経営学部などでは必ずしも卒業論文が必修になっていない場合もある。一方、理系では個人制作というより、共同研究室のテーマの一部を担うという形が多く、卒業論文に関する相談も研究室内での人間関係が問題化したものが多いように思われる。このように卒業論文は学部においてその心理発達の意味合いが異なっていることが予測される。筆者は主に文学部中心のキャンパスで相談に応じてきたが、このためモデルの構成にあたっては偏りがあったと考えられる。ここでは本モデルの限界を明らかにする必要があると思いい、以上のことを記して後の議論を進めたい。

### 2. 卒業論文のもつ課題性と3階層モデル

まず、各事例の主訴を卒業論文の課題性という視点から解釈し、その上でこれに動機づけの視点を加えて仮説的に提示した3階層モデルの妥当性を検討する。

#### 1) Aさんのケース(心理的課題性/自己決定大)

Aさんの卒業論文はある哲学者の研究をもとに「いかに感情をコントロールするか」ということをテーマにしていた。これは本人の中学、高校時代の体験にもとづいており、それが哲学的に昇華された問題設定であった。Aさんにとって、このテーマは生きていく上でどうしても解決する必要のあった問いで、学問的問題である前にまったく心理的課題だったのである。このため、必然的に事例のような(哲学書を読みふけ

りサークルを追い出されるような)深みに入り込んでしまったのだとも考えられる。Aさんが自身の言葉で「精神的な遺書」であると位置づけたように、卒業論文制作はまさにイニシエーション的な意味さえ持つものであった。

Aさんの卒業論文に対する態度は、内的な問いに対する、生活まで含めた全人的な取り組みの一部であったという点で、Deciのいう自己決定が重要なレベルにあったと言うことに異論はないであろう。

これは動機づけ理論から見ると、内発的動機づけの状態と言える。しかし、内発的動機づけが高いからと言って、すぐに卒業論文が書けるとは言えないことは注意すべきである。つまりAさんは「思想を生活するだけで精一杯」の方で、書く気(制作)にならなかったのである。Vallerand & Ratelle (2002)の動機づけ理論によれば、全般的な動機づけと領域・行動レベルの動機づけは区別され、個人内では異なるレベルの動機づけが相互に影響し合っていると考えられる。すなわち、英語は好きだが、英単語を暗記するのは嫌いということがありうるのである。これは来談当初のAさんの状態をよく説明するだろう。

一方でAさんは書き出したら早いこと、また文章表現の巧拙などを問題にしなかったことが特徴的であった。これは、心理的課題性はモデルという低次の課題性が達成されているという仮説を支持していると考えられる。

#### 2) Bさんのケース(表現的課題性/自己決定中)

BさんはAさんに比べると題目そのものは流動的で、むしろ「自分の思っていることが上手く表現できない」ということを訴えてこられた人であった。そのような表現に関する課題が、卒業論文を「書く」という作業において一気に賦活され、問題化してきたのだと思われる。この方が演劇部に入っていたことや、卒業論文のテーマで芸術に関する問題を扱おうとしたのも、自然なことに感じられた。鶴田(2001)は学生相談の視点から“卒業研究のレベルはさまざまでも、学生がそれまで探求してきた自分というものを人自にこだわらず表現してみよう(傍点筆者)とした場合は、なんとか上手くいくようだ”と述べている。Bさんはこの“人目にこだわらず”、“自らに表現を許す”ことがまさに課題であり、これはまたDeci et alの言う自己決定の問題の亜型として見ることもできるだろう。Bさんの「何でもいから、自分で作りたかった」(#3)という言葉は、この文脈から理解できる。

では、このケースがなぜ動機づけの質において中層に来ると考えられるのだろうか。Bさんは論文のテーマが内発的であったというより、正確には「表現することに自信をつけたい」という動機が内発的であったと言うべきだろう。卒業論文はBさんの表現の素材として重要であったが、卒業論文でなければならない必

然性は必ずしも高くなかったと言える。しかも、表現、レトリックの問題は他者の視線を取り入れたものであるので、評価という外発的な側面を自然含んでいる。実際、Aさんがほとんど他者の評価を問題にしなかったのに比べ、Bさんは他者の目ということ強く意識していた。一方、BさんもAさん同様一旦書き始めると、短期間で一気に書き上げることができていた。これは表現的課題性の人は少なくとも作業的課題性が達成されていることを示している。このようなことから、表現的課題性を動機づけの質において中間に位置づけることは妥当であると考えられる。

### 3) Cさんのケース（作業的課題性／自己決定小）

論文がレポートと違うのは「問い」そのものを作らなければいけない点にあることは既に述べた。Cさんはこの「問い」を作り出すこと自体に困難があったレベルと考えられる。“受容的勤勉性”（東，1994）でやってきたCさんにとって、問いを発見し、積極的に教員に相談に行き、アピールするように文章表現するということは、苦手なものばかりであったと思われる。それらはこれまで避けて通ることができていたが、卒業論文でついに避けられなくなったのである。そのため当初卒業論文は、本人も言っていたように「どんな形でもいいから出して卒業するだけ」が目的であった。この状態は、動機づけ理論から見れば、卒業論文制作が卒業のための手段になっているという意味で外発的動機づけということになるだろう。

このようなCさんの状態は、モデルに沿って自己決定の程度のもっとも低い段階にあるということも可能であろう。これは内定先から「題目を教えて欲しい」と言われて、初めて決めることができたことに如実にあらわれていた。

先の二人に比べ、就職の方が先に決まったということも、Cさんの特徴的なところであった。Aさん、Bさんともに内発的動機の強さのゆえか、卒業論文を仕上げたから就職を考えたのに比べ、対照的である。おそらく就職活動には、パターン化された質問に答えていくことで自然に進んで行くという側面があるのだろう。彼にとっては、卒業論文より容易であったのかもしれない。

また、Cさんは卒業論文がほとんど仕上がってからようやく表現的な課題（いかに巧みに書くか）があらわれた。逆に言うと、それまで論文に関する表現的な課題は出てこなかったのである。これも仮説モデルと合致する傾向と考えられる。

\*

ここまで見てきたように、卒業論文の相談はいずれも特定の課題性におけるつまずきとして捉えることが可能であった。また、それぞれの内容について動機づけの視点を加えると、一次元的に把握しやすくなることがわかった。紙幅の都合上、今回は典型的な事例の

みを取り上げたが、筆者の経験では、その他の卒業論文に関する相談も同様に本モデルを当てはめることが可能であると考えられた。

### 3. カウンセラーのかかわり方から見た3階層モデル

次に、各事例についてカウンセラーのかかわりを検証する。この作業により、3階層モデルの妥当性と臨床的意義をさらに検討してみたい。

Aさんは書くことが命と引き換えになるほどの重みがある人であった（夢1）。そのように運命づけられている人に、「なんでもいいから書け」（作業的課題性）と言うことはできない。つまり、心理的課題性の人には卒業論文のもつ作業的側面をひとまずおいてテーマに徹底して付き合うことが必要だったと言える。よってカウンセラーも本を読んで勉強し、議論するような形にならざるをえなかった。このようなカウンセラーの対応は自己決定という文脈で見るとよく理解できると思われる。カウンセラーは教え／助言する相手ではなく、彼の自律性を尊重し、テーマに対してより自己決定的であるように向かい合う相手であったのである。したがって、カウンセラーは学生と対等に議論したり、場合によっては教わるようなかかわりをすることもあるのである。これは専門の教員による指導との大きな違いであろう。

この場合外的報酬を強調しなかったのは動機づけの理論からも適切であった。Deci et al (1995) はもともと報酬なしで自発的に取り組んでいる活動に対し、外的報酬が提供されたとき、かえってその内発的動機づけが低下することを実験的に証明し、この分野にセンセーションを巻き起した。これは内発的動機づけの減退効果（undermining effect）と呼ばれている。この知見によるならば、自らの興味でずっとやってきたことに、急に「卒業ができる」という外的報酬が強調されると、せっかくの内発的動機が低下してしまう可能性があったのである。おそらく、提出が遅れるほど担当教員との相談では論文制作に伴う報酬（単位／卒業）が強調され、彼のやる気を減じていたのがこれまだったろう。

Bさんの面接ではテーマ自体より「表現」ということをめぐって話し合いがなされた。また、サークル活動として熱中していた演劇（表現）についてもしばしば話し合われた。続いて、表現欲求の奥にある“才能”や“オリジナリティ”の問題が徐々にクローズアップされていった。そのようなカウンセラーのかかわりによって、Bさんは自分が他者の評価を気にしすぎたこと（外発的動機）について考えを深めることができた。このようなことから、趣味である絵について「描きたいなら描いてもいいんだ」と思えるようになったことは、Bさんにとって表現というレベルで卒業論文を書くこととオーバーラップさせられるもののように

あった。カウンセラーのかかわりは、一貫して〈あなたにとって卒業論文を書く意味は自分で表現することに対する自信を得るといふことにあるのだと思っ聞いている〉といふことを伝えることであった。

Cさんにおいては卒業論文制作の動機はまったく外発的なものであった。彼はそれを十分納得しながら、しかも「どう動いたらいいかわからない」のであった。すなわち、Cさんにとって卒業論文制作は、その内容以前に現実的作業スキルの獲得を促すといふ心理発達の意味があったと言えらる。にもかかわらず、カウンセラーはCさんに対し、最初内発的動機を高めようとして関わった様子がかえらる。例え、趣味であるカメラの話に焦点を当てていたのもそうであった。これは当初カウンセラーの側に、本人の中に当然内発的な動機があり、それが自然に発現されてくること望ましいといふ考えがあったためだと思われらる。これは理論的には正しいと思われらるが、現実には適切でなかつた。言い換えらると、1年目はカウンセラーが自己決定の高い課題性を無意識的に要求していたことでクライアントとの間にずれが生じていたと思われらるのである。

これを踏まえて、2年目は「卒業のために提出さすればよい」といふ作業的側面を強調するアプローチとなつた。彼は内発的動機は低かつたが、決してアパシーではなかつた。ゆえに、卒業論文を通して、物事を形式的に解決するコツをつかむことができらば、彼にとって意味のある体験になるだろうと思つたのである。したがって、面接は内容よりも資料の集め方から日々の過ごし方まで、ずっと具体的なアドバイスに近づいた。場合によってはかなり指示的にもなつた。さらに原稿を持ち込んでもらい、行き詰っているところを一緒に検討するといふスタイルまでとることがあつた。これらはAさんやBさんのケースと対照的である。このようなカウンセラーの対応はある程度成功したように思われらる。

本事例のように、卒業論文制作が作業的課題性をもつた場合、無理に自己決定を促すのではなく、まずは身につけて来なかつた作業スキルの獲得を目指す方が適切であることを推測させる。

\*

ここまで見てきたように、卒業論文は青年にとってやり残した発達の課題に直面させる働きがあり、そのときカウンセラーが適切にサポートし、論文制作をやり遂げたとき、彼らがより適応的な心理状態を獲得しうることがわかつた。さらに、同じ卒業論文制作困難の事例でもカウンセラーの接し方が異なっていたことが明らかとなつた。これは内発的動機を尊重し、ゆっくりと話し合いながらテーマについて自己決定できるように待つか、外発的動機を重視し、より明示的に卒業論文のもつ表現的課題性や作業的課題性を利用しよ

うとするかの違いから生じていたと思われらる。

#### 4. モデルのダイナミクスとカウンセラーの存在

Cさんは、卒業論文がようやくある程度形になり、提出まであと一步のところまで行った頃、突然こちらがあわてるほど内容にこだわり出し、また自らのアイデアで積極的に調べ直し始めた。さらに、「もう少し巧みに書きたかつた」といふ表現的な欲求さえあらわれてきた。いわば、自己決定の欲求（内発的動機）が高まつた印象があるのである。実際1年目の提出失敗を考えると、この変化がなければ最後の粘り強さ（初めて徹夜できたような）が利かなかつたようにも思われらる。このように見ると、本モデルは決して固定的なものではなく、動的な運動をはらんだものでもあることが想定される。実証的な研究においても、近年、動機を外発的か内発的かの二分法的に位置づけるのではなく、両者をスペクトラムとしてとらえる考え方が主流になりつつある（速水、1998）。したがって、ここでは外発的だつた行動が内発的なものになるといふ変化（あるいは逆も）は十分起こりうると思われらるのである。自己決定理論はこの動機づけのダイナミクスを考える際に、大変有用な理論となっている。最後に、モデルに沿ってこのダイナミクスについて考察しておきたい。

Deci et al (1995) は内発的動機のもととなる基本的欲求として「関係性の欲求」(need for relatedness)といふものを想定している。これは漠然とした概念であるが、実験心理学者でありながらヒューマニスティックな動機を重視するDeciの特徴がよく出ている考え方と言われらる。この前提を踏まえ、Deciは外発的動機から内発的動機への変化には“教育者と学習者の関係性が重要な役割を果たす”といふ。市川(2001)はこれを具体的に、“(教育者と学習者の)関係が密であることによつて動機づけの内面化が促進される”と述べている。この教育者のところをカウンセラーと言ひ換えても当然よいだろう。

Cさんは他の二人に比べると、サークルにも入つておらず友人関係は希薄で、熱意をもって何かに取り組むといふことが少なく、5年間を淡々と過ごして来た。その中でカウンセラーに出会つたのである。大学生活の中でおそらくはじめて密に、継続的に出会つた他者であつたらう。このことが、Deci et al (1995) が「関係性の欲求」と呼んでいるものを刺激し、論文制作の内発的動機を高めたのではないかと推測できるのである。Cさんが手紙の中で「面接で話すのが楽しかつた」と書いていたことは、当時の内容を振り返ると意外であるが、「関係性の欲求」といふ視点であらためて検証すると納得できるように思われらる。

さらに筆者は、「関係性の欲求」は内発的動機を高めるだけではなく、より広義に動機づけの固着を防ぎ、

動機の質に柔軟性を与えるものとしてとらえることができるのではないかと考えている。例えばAさんと面接では、カウンセラーは心理的なテーマの話に徹底して付き合っているつもりであったが、それについては未解決のまま、彼は自然と卒業論文に対する外発的動機の重要性に気がつき始めた(「外側は立派でも中身はたいしたことない」や「出せばいいんです」というふう)。おそらくAさんは、他の人から見れば宙に浮いたような議論であっても、それに「正面からきちんと付き合ってくれる存在」が欲しかったのだと思う。それによって、逆説的に、内発的動機に固執することから離れていったのではなかろうか。Cさんとは異なるが、この意味でAさんも「関係性の欲求」に敏感であったと考えられる。それが満足させられたとき、卒業論文に対する外発的動機を受け容れる余裕が出てきたのではあるまいか。また、Bさんが最後になって「向き不向きにこだわらずに就職活動を始めてみようと思うようになった」と言われたことも、同じく外発的動機の重要性に気がつき始めた兆候と考えられる。平易に表現すると、正面から関わってくれる相手がいることによって、自分にとって卒業論文の意味を広くとらえることができるようになったということである。それはクライアントの心理発達にバランスや柔軟性を与えて大変有意義なことであったように思われる。これは実は3階層モデルの最も重要な点である。

この「関係性の欲求」はコミットメントの問題でもあるので、治療者の側には逆転移のような現象として体験されるだろう。例えば、Aさんとテーマについて激しい議論になったことがそうであろう。またCさんの事例で面接時間をオーバーしたり、代わりに書けるものなら書いてあげたいと思うようになったこと(#18)、また締め切り間際にカウンセラーがCさんの夢を見たこと(#20)などもそれに該当するだろう。このような「なま身の人間として向かい合う」ことが、クライアントの動機づけの固着に変化を与えるのかもしれない。このような現象は、“逆転移の治療的意義”と河合(2002)が呼ぶものの一つのあらわれとみなすことができる。つまりカウンセラーの〈意図的なかわり〉とは別に、単に〈存在〉としての影響が大きくあったのである。モデル図の各課題性を移行する矢印にカウンセラーの存在の影響を示す矢印を入れたのは、このような現象を表現したかったためである。これは卒業論文の心理発達の意味を動機づけ理論から理解し、それに対応したかわりを検討しながら、大変パラドキシカルなことと言わざるを得ない。

しかし、卒業論文制作のような修学問題に対して「カウンセラーが相談にのる」ことの意味は、案外このあたりにあるのではないだろうか。

## VI 結論

本論文では、仮説的に提示した「卒業論文の3階層モデル」がある程度妥当なことを示した。このモデルで重要なことは、卒業論文制作に内包される心理発達の意味を単に3種類に分類したことにあるのではなく、それが階層状になっていること、かつこのモデルの中にカウンセラーのかかわり方の手がかりが含まれている点にある。

ここまで見てきたように、卒業論文は相当な苦痛やエネルギーを必要とする点において、何の痛みも伴わない成人式などよりよほど意味のあるイニシエーションとなっていることが多い。そのような意義深いものが卒業前に自然にアレンジされていることは、学生相談における技法的利点となりうるだろう。このため卒業期の学生相談では、学生の見立てと同時に「卒業論文の見立て」も有効になる。本モデルがその一助となることを願う。

## 引用文献

- 東洋 (1994) : 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて。シリーズ人間の発達, 12. 東京大学出版会.
- Deci E.L. & Ryan R.M. (1985): *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. Plenum Press, New York.
- Deci E. L. & Flaste, R. (1995): *Why we do what we do : The dynamics of personal autonomy*. G.P. Putnam's Sons, New York. 桜井茂男 (監訳)・鹿毛雅治・中山勘次郎・唐沢かおり (訳) (1996) : 人を伸ばす力—内発と自律のすすめ. 新曜社.
- 速水敏彦 (1998) : 自己形成の心理—自律的動機づけ. 金子書房.
- 市川伸一 (2001) : 学ぶ意欲の心理学. PHP新書. PHP研究所.
- 鹿島茂 (2003) : 勝つための論文の書き方. 文春新書. 文藝春秋.
- 河合隼雄 (2002) : 心理療法における転移/逆転移. 河合隼雄著作集第Ⅱ期第2巻 心理療法の展開. 岩波書店. 106-126.
- 永田良昭 (2011) : 心理学とは何なのか—人間を理解するために. 中公新書.
- 岡田 涼 (2010) : 小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化. 教育心理学研究, 58. 414-425.
- 鶴田和美 (1994) : 大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味—比較的健康的な自発来談学生についての検討. 心理臨床学研究, 12 (2), 97-108.
- 鶴田和美 (2001) : 卒業期の特徴. 鶴田和美 (編著). 学生のための心理相談. 培風館. 33-41.
- Vallerand, R.J., & Ratelle, C.F. (2002): *Intrinsic and extrinsic motivation: A hierarchical model*. In E. L. Deci & R.M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. 37-63. Rochester, NY: University of Rochester Press.

## 付記

論文作成にあたり事例提供を承諾して下さった学生の皆さんに感謝いたします。

(2013年9月30日受理)